

片側性完全唇顎口蓋裂患者の歯数の異常について

研究協力者

大阪大学歯学部 作 田 守

唇顎口蓋裂者においては日常臨床上、欠如歯あるいに過剰歯など、歯数の異常をしばしば認める。今年には昨年の報告においても頻度が最も高い片側性唇・顎・口蓋裂患者について、上下顎歯数の異常、および裂の部位と同部の歯との関係を調査した。さらにこのうちより乳歯列から永久歯列への交換の様相が連続的に観察可能な症例については乳歯から永久歯への推移の状態を検討した。

調査対象は、大阪大学歯学部附属病院矯正科に来院した片側性完全唇顎口蓋裂患者で、男子40名、女子36名、合計76名であり、このうち右側に裂をもつ者26名、左側に裂をもつ者50名であった。乳歯列から永久歯列への連続観察が可能なものは46症例であった。

今回の調査により次のことが明らかになった。

1. 過剰歯や欠如歯をもつ症例は、乳歯列で30.4%、永久歯列で75%と高頻度であり、男女間に性差はなく上顎に多発していた。
2. 上顎側切歯、上顎第二小臼歯欠如症例は、寺崎・塩田らによる一般人のものと比較すると0.1%レベルで有意に多く認められた。
3. 乳歯列ではA・B間に裂をもつ型(A▼BC)が80.5%と最も多く、次いで過剰歯型(AB▼B/C)が多く13%に認められた。(▼は裂部位を示す。以下同様)
4. 永久歯列では、側切歯欠如の(1▼3型)が64.5%と最も多く、次いで1、2間に裂をもつ(1▼23)型が多く27.6%に認められた。
5. 顎裂部位としては、乳歯列では従来の報告どおり(A▼BC)型が基本型と考えられるが、永久歯列では(1▼3)型が基本型と考えられた。
6. 乳歯列から永久歯列への連続的な観察により、BまたはB▼から後継永久歯が形成される確率は38.8%であった。
7. 裂の近心側のBから2が形成される確立は66.7%、遠心側のBまたはB▼から2または2▼が形成される確率は34.9%であった。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



唇顎口蓋裂者においては日常臨床上、欠如歯あるいは過剰歯など、歯数の異常をしばしば認める。今年は昨年の報告においても頻度が最も高い片側性唇・顎・口蓋裂患者について、上下顎歯数の異常、および裂の部位と同部の歯との関係を調査した。さらにこのうちより乳歯列から永久歯列への交換の様相が連続的に観察可能な症例については乳歯から永久歯への推移の状態を検討した。